倭訓栞後編 須世曾之部 十

和書門 類 二一六五一 號 八〇 函 二 架 八二 冊

内閣文庫 和書 類 二一六五一 號 八二 冊 二六三 函 四 架

内閣文庫		
番號	和 21651	
冊數	82 (74)	
函號	263	10

国立公文書館 National Archives of Japan

倭訓栞後編巻之十

すの部

洞津　谷川士清纂

すいえ　海人藻芥に椙原を禁中詞にすいえといふとみえたり

すいた　今の姓に吹田をよめりされど次田といふべし轉じてすいたと称る也吹の音にはあらん

すいだ　酸葉の義酸模也といへり村民酢に代て用ふといへり畿内にていふ上野にてすいこき加賀にてすいと江戸にてすかんぼうともいへり

すいくわ　西瓜の唐音也水東日記に西瓜自元太祖征西域始得と見えたり○唐山にて核を干て菓子とす○我邦にて寛永年中より空華集にも西瓜今見生東海と作れり近世黄西瓜あり○大坂にてさいうりといふ琉球にて四月西瓜熟

といへるから種あり核赤し

すゐぎう　水牛とよめり一名沈牛よく水に沈むよて潜牛とも
いへり世に専らいふは水牛角也呉牛見月而喘といふも水牛
を指せり近年下総國の大川に出て農作を荒せし事あり

すゐぎんろ　水銀爐とよめり本草にいふ靈砂也

すいものぐさ　倭名抄に酢漿草とよめり味の酸きなり即
うさだくさあり

◇すがひ　酢に入て動く貝なれば小螺の䗩也紀州の俗がんから
といへり即君子也といへり物理小識に相思螺とみえたり縄に
もすがひにもかゝらぬといふは藁の縄によらぬをいへり○神宮の
邊にては稲を刈こむ時にわらうち藁又すげをとりてねぎ一束
をゆふ也此をすがひといふすゞのゆひの畧なるべし縄にもすがひにも
はなふ縄をいふなり

すがのね　山菅の実也万葉集に妹がゝの菅の実とよみて往

吾をとよめり○此實童べは吹玉といひて弄翫せり瑠璃の玉なと
き實なり

すゞのむらどり　海邊によめり多く集て飛鳥也といへり萬葉
集に菅鳥とみゆ貫之のたゞの鳥とよめるも是にや

◇すきのさね　鉏の鋒の義玄参也といへり又ひるのうすつけと
いふ

すぎあるかく　万葉集に過去をよめり過ゆかしといふの略語
にて同意なり歌にもにし方なくしきふとみえたり

◇すくもむし　倭名抄に蠐螬とよめり尓雅注に在糞土中と云
義也此物夏秋の間蝉に化すといへり俗にかくと或は根きり虫とも
きりうじともいへり○一種果實を食ふあり和漢名を同うせん
孟子に螬食實といへり

すくなひこのいなね　倭名抄に石斛を訓せて薬草なれど少
彦名の飯根といふなるべし又いはぐすりと訓せて石に生ども

てこ今音となえて呼べし花紅白二種あり○朝鮮石斛又石斛
蘭と称するは大也是も花に紅白にあり○石蔛に似て小なる
ものにて木斛といふ花も似たりむぎらんともいふ麦斛
也ともいへり木蔛の名も本草に出たり

△そしか　鯓魚之○鯓桶の字物類相感志に見えたり

△すゞき　鱸とよめり口大ハ巨口細鱗なるといふ意也一名四鰓魚ともいふ四鰓鱸ハ長七八寸背眼鱸ハ長さ六七寸三四尺にいたる故鱸しん鰓大開者也ともいへりすゞ鈴鰓の義なるべし玉葉集にもよめり○三河のすゞ川に大鱸ありて人を捕るといふにて夜ハ渡るを禁す○小田原北條の家臣福島伊賀守ハ勇力千人にこえたりといふある時に馬入川にて猟せしに従者水底に入て出ず伊賀守潜て入てみれバかの従者を喰ふ者にけり短刀をとりて刺殺し曳上しにたゞ七八尺餘ありし鱸なりといへり○平清盛伊勢安濃津より船にて熊野の社に詣し時鱸躍て船に入ぬ清盛周武王の舟に白魚の入し瑞を思ひ手づから調食せし事平家物語に見えたり○新六帖に旅の泊れるたのもしき思ひなくとよめるハ張翰が故事也○安藝の人油坏の事をすゞきといへり錫坏の略にや錫ハ酒器なりといへり三議一統ちなしの臺子にやきしな梅干などりてすゞきに入て前に置くと見えたり

△すゞめ　雀を訓ぜりすゞハ小なるといふめハむれ又群がるをいふなり月令に九月雀入大水為蛤と見えたり○鬪雀不怖人とて気の猛き鳥にて爵ともよめり○雀ハ踊て歩をもて雀の小躍といへり西土にも雀躍と称せり○一説縉紳齢九十に及べり平常閑居し席上に打まねして雀を飼て樂めり一日諸雀に戯ていへらく汝等を養ふも日久し何ぞ珍味を齎し来らざるやと後日又集ゆ来をくはへて去ぬ其跡に雀のされかうべあり時に搢紳病にふせるが此して良藥ならん事を予に訂し給ふ不

識となりて答ふ其後年を踰ずして終焉せしとなり捜神記に
載たる漢時楊寶年九歳華陰にゆきて黄雀の鴟梟のために
搏れしを見つけ取帰て養ひぬ毛羽成の後黄衣童子と化し白
環四枚をもて寶にあたへて君が子孫位三等に登らんといひて去
ぬとぞ○笑苑千金に雀讀論語と見えたる諺語によりて勸學院
の雀蒙求をさへづるといふ意同じ洛の四條大宮の西に更雀寺あり
此地勸学院の跡なりよりて雀の森ともいふ寺号は實方の故事によ
れり知更雀の故事天寶遺事に見え拾芥抄に勧学院は三條
の北壬生の西藤氏學生の住也と見えたり○ふくらすゞめは体を
ふくらかしたる也入内雀あり背青し實方中将の故事に据て
名くるなりしといへど心得がたし木葉雀は紫の濃色なり虎雀紅
雀あり近世外國より来る枕草紙にかしらあかき雀と見ゆ黄雀
をにうちすゞめといへりにうちは赤口の義なるべしにはすゞめ古事
記の哥に見えたり河原すゞめ新續古今集に見えたり又筥根雀

あり雀の純白なるは又白斑の者にありともに希也緯書に白雀を
瑞應とせり○鶺鴒を播磨に河原雀と呼伊勢白子に濵雀
といふ

すゝき

日本紀に荻をよめりすゝきは小の義きは芝刺をいふ也
本草にいはゆる薄又芒に作る物を訓ずべしといへりされど芒は尾
花なりさゝきは山荻陸荻などいふ也海荻水荻はをぎといふもい
へり倭名抄には荻をおぎと訓ぜり古よりをぎすゝき併せ称せり
日本紀に茅荻をちかやすゝきとよめり常に茅はちがやと二物を並称
せれど類をもてよべる也神代紀の野薦を私記にはすゝき
なりといへり○孝徳紀に大伴直蘆ありすゝきとよめり哥に
糸すゝきしのすゝきまそほのすゝき一むらすゝきさゝすゝき花す
すきなどよめり末なるは穗のとよめり後撰集に
花すゝきほにいでやすき草なればみにならんとはたのまれなくに
○鷹の羽すゝきは羽ぶしに白文あり常盤すゝきは冬をもかれずといへり

在原とも称せり○冬すゝきハ石芒也といへり増穂なり大嶋なり○新撰万葉集にハ薄とよめり尓雅に草聚生曰薄と見えたり江次第に髑髏目中有野薄と書して小野止波不成薄生計里の歌を載せ枕草紙に撫児のすゝきになりくるといへり今の俗藁をすゝきといふも是之薄を萩と同じく訓ずるなハ萱も草もとわくかやと訓ずるが如し畢竟通別の意のみ俗に芒ノ字をよめるも辨色立成によれり芒ハ草の茂まるをいふによれるなるべし○太平記に須々木氏あり

すゝみな　新撰字鏡に萞をよめり羊蹄香菜と註せれど今のぎしぎしなり

すゞだま　薏苡子をいふすゞハ數珠の音たまハ実なれバ花鏡に俗名菩提珠小児多穿作念佛數珠為戯と見えたり和名抄につしだまと見えたり東國にすゞご上総に八斛といふ一説に凡て五種の異ありとて薏苡子と田にいふ禾ハ似て非なり薏苡ハかくるむ

ぎ之年に蒔て宿根よりハ生せず實の殻扁く麦の皮の如しといへり

すゞだな　参遠の俗に稲穂の花をいへりかんの内より出るなり鈴に似たるなるべし

すゞらん　鈴蘭の義芛蘭也といへり大和にまた紀ありて江戸に鼈甲草といふを鹿蹄草之といへり

すゞがき　信濃柿也猿柿ともいふ鈴柿の義之筆頭の如きを筆柿といふ君遷子也

すゞむし　鈴虫の義鳴声の鈴に似たるをもて名とせり西土の俗称なる金鐘児月鈴児などいへりされど鈴虫ハ鈴の響松虫ハ松の声に似たれバ名づけしを今の世称する物ハ互に誤りしと幽齋翁の説なりしとぞ○侍従の事をいふハ音に就ていへり又鈴虫中納言と称せしハ綾小路有資卿之といへり○花草にもいへり花の形をもて名とす

すゞかけ
鷹にいふ上毛の上に鈴かくしとてちいさき羽二ツ有是也紫草にも装束しぬるを紅葉装束とも錦装束ともいふ也

すゞのこゑ
鈴皃の義鳴声をもて名とせん歌にもよめり冠皃也といへり西行法師の詞
須磨の沖のよそ見なりして渚のこゝろにきすゞしくみうつ

すゞなり
倭名抄に涑をよめりもてあそぶ義なるべし挑草紙にをすゞなりとて下ろぬるとみえたり

すゞめがひ
雀貝の義至小の品也夫木集に哥有

すゞめうを
日本紀に雀入海化而為魚名曰雀魚とみえたる八今針千本といふものなるべし魚虎也といへり但州にて始終福といふ大和本州の圖にある所のもの是なるべし今雀魚といふ物は一名雀河豚(フグ)又石ふぐといふ伊豆の海に多し形三稜のもの四稜のもの頭上有刺もの無針もの数品あり海牛也とも鯛魚なり

ともいふ駿州にていふ物はあまさき也

すゞめはぎ
遠志の東名也雀荻の義雀は小さきを云なり

すゞりぶた
硯匣の蓋をいふ也八硯のふたに花など入て賜はりし事撰集に見えたりよて後世別に此器を製して誂ふ物になれり東坡が硯蓋銘に研猶有石硯更无山妻女既去孟子不還

すゞのき
巴戟天也といへり根連珠をなしたるをもて名く小木にて大葉の虎刺の如しといへり

すゞうり
雀瓜の義馬㼎兒也ともいへり垣根瓜ともいへり所によりて鈴なりともいふ

すゞめだち
大黄蜂をいふ山中にあり

すゞめのたま
竹蓐也といへり

すゞふりばな
沢漆也といへり鈴振花の義又燈臺草ともいへり備前にみこのすゞといふ東都の方言に大戟を高燈臺といひ甘遂夏燈臺といふ同類をもてなり

すゞめおやこ　救荒野譜の看麥娘也といへり或ハ地楊梅と訓ぜり

すゞめのまくら　通雅に雀甕ハ蛄蟖房といふ是也毛むしの巣也

又すゞめのたごといへり

△すだち　喬木にして三抱に至る物あり實みかんのごとく圓し此實を阿波にてハすだちと呼ぶ常に此実をしぼりて酢に用ゆ四時にあり阿波にてハ柔酢を造る事ハなしといへり他國に移し種てそだゞともし漢名を不知といへり

すゞれがひ　蘆のかくにある蛤也又姫すゞれと称する物もあり夫木集に

浪よする吹上の濱乃すゞれ貝風のおとすいそき拾ハん

△すぢうを　又鳴魚と名く海魚数すぢなんすぢのひある紋れてれる紋皆名を同うして

△すつぽん　鼈をいふ出没の轉訛なるべしといへり○扁斗を名

くるも鼈より出たるなり又榼ともいへり○吹筒に名くるも是なるよりの諢名なるべし○すつぽんめなどいふ俗語もすつぽんの如くなるにや

△すれたるか　新六帖に見ゆ巣立の雛鶴をいふにや

すなずり　腴をいふ腹下の肥たる處にて摩を鯨にいふ

すなほり　沙魚の類吹沙也といへり沙を堀て身をかくす者也すなほりともいふふきやだといふ物よく似たり

すなめり　安永の冬阿濃の津入江にて取たり形状山椒魚に似て尾なく四足あり手ハ指四足ハ五指也毛なく鱗なし眼細し面ハすくく舌もなし骨もなし荒が如し熊翁にてハすなめりといふとぞ鼠色にて光あり全躰四尺ばかり手足ハ鼈のごとし好んで蟹を食ふとて蟹の集る所に来るとぞ

△すまひとるふね　船の渚につきて出る紀州より潮まつ中臣祓の大津の辺に在る大船といふに同じ

△すゞ石　伊賀にて土石の間なるものをいふ伊勢にてもすゞ土といへり土左にては土石の地をすゞれといふ
△すびき　弓にいふ戦國策に虚發と見えたり○簀走は捕のあみを簀引といへり
すひだし　膏薬にいへり直指方に用膏吮瘡の語にいへり
すひくだ　田の水を受て又直に干るをいふ吸吐田の意なるべし
すひくち　酒の上戸をいふ上野にてすひくちといふも同義なるにや
すひかづら　新撰字鏡にすひかづらと見え倭名抄に忍冬をよめり花の甘くしてわらはべなどの吸ものなれば吸葛といふにや凡蔓草は左旋なるに此のみ右旋なるをもて左纏藤の名あり　左旋の物は右纏右旋の物は左纏也
△すべら　花葉藪手鞠に似たる小樹之実なれにして香もなく駝毬花之といへり又すべらといふ枝を撓て薪を結べしなれば　うつぎといふも同種なり紙をすくに用ふべし

△すゞかり　七月半までの若鷹をいふといへり
すまひぐさ　金葉集赤染衛門集などに見えたり白慈州にしるべし俗にすまふとりぐさといふ西偏にていふものは八つのやはり草之○新撰字鏡に旋覆花をよめり○常樂會の舞人をはゞ州を面々にとりてかざしまひけるとぞ
すまろぐさ　和名抄に天門冬を訓ぜり新撰字鏡同じ　すまろはそゞろなと同じ葉の細かに聚るをいふにや
すなかしは　牡蠣房をいふすなを須磨之
△すみれ　和名抄に菫菜をよめり醋掬の義なるべし西土の賦にも烈有椒桂滑有菫楡といへるを見てこれといふと一説に花の形の工人の墨斗に似たれば墨入筆の義ともいへり若水の説にすみれは紫花地丁にて一名菫々菜和名式に見えたるすみれぐさともいふ上野にすまふ花といへり花仙臺にかぎらず西國にことの馬といへり菫菜は別種之といへり花色いろいろなり○白

川ちみれ(?)ハ箭頭草也といへりやぶすみれハ蔓生のをみとらへりえ
ぞすみれハ胡菫草也大ちをられともいふ

すくいろ(?)
陰陽家に花押を占ひて吉凶をいふ事あり大谷刑
部少輔其初め洛東大谷の修験者にて豊臣秀吉の弱冠なりし
時其花押を占ひしといへり其術をやゝ久し西土の相字の類也讖
諱の變風といふべし

すゞかしハ(?)
小鳥の名といへりさとぐの種也

すゞふぐり(?)
金銀蓮花也といへり荇菜の一種也○いやしきが
岐の言葉に世のをこれごりをちるとみるも世の諺あるよし義政
公の筆にみえしとかり

すゞめがくさ(?)
平康頼入道が寶物集に深草のみのどかされ
させたまひされハ上毛野岑雄といふ者御別を歎けるが年来見
馴たる櫻の下にてよめる
深草の野辺の櫻し心あらバ此春ばかり(?)墨染にさけ

草木心なしといへども物の哀ハ知をハらて其春ハ墨染に咲たるに
とありけり今も深草の墨染桜とて墨染寺にありとぞけり古今集
にみえ堀川の大政大臣身まかりにける時よとみえたれどおぼつかな
しとぞ

△すむのり
倭名抄に紫苔を訓ぜり節用集に水雲をすのり
とよめるも此義なるべし

すむつかり(?)
大豆をいりて酢をかけつけハふやけてよくなさらる
也と宇治拾遺にみえたり

△すもゝ
新撰字鏡に李をよめり酸桃の義也美作にすむもゝ
といふ夫木集に
誰をみよ李の木下のそせハ冠かたふけもやハかれなる(?)
所謂李下に不整冠の意をよめり○御李と称するものあり変の味
よろし漢名ありさんごあしとも云

△すらんのかうと(?)
蠻名也蛇に似たる木にて解毒の薬と云也

△すらんがすてかん　阿蘭陀より来る蛇の頭にある石也といふ
毒腫を吸毒を解すは水に浸せばいつまでも沫を吹出す此物一
たび試みて後を乳汁に投ずれバ所吸の邪氣を吐出すよて數次
用ひて功能減ぜずまむしの毒を解まり藥性纂要の吸毒石也
といへりすらんがハ蛇をいふすてかんハ石なりといふと譯語家の説也或
人考得て龍角也といへり又龍骨よりしもいへり俗名じやすの石
又相州三浦に黿色なる石あり是を吸石と名く此石を砕きて
癰腫に傅て其功同じとぞ
△すりぬか　米穀をいふ又荒ぬか又ぬかゝ糠ともいへり又礱糠と
もとゝめ
△するめ　和名抄に小蛸魚をよめり今烏鰂にするめといふものと云
ありて其物をちりしするめとて祝賀に用ふ鈔にあれ
だにもたこの名なりしや又古へハたこそも今のするめのごとくも
のを製せしや俗に鰑の字を用ふれど本義にあらず脯鰲を訓ず

しするめいかをて柔魚なりといへり
△すゐもん　水門の音なるべし聞を水門也と注せし是也水門ハ
今いふ水ぜきん也
すゐだう　水道の音なるべし
すゐさう　水葬也下民ハ上古水葬をも今出雲國造水葬をも是
古法也といふ葬水中ことハ棄水中鳥也後世の水葬に非ず
すゐろう　枕草紙にみへ○拾芥抄笛の部に水龍とみへけり
江記にも天曆御宇寶物とみへたり
すゐかん　水干とかけりのりに糊を用ひずて水張にして干たる
絹の名なり末代に鞠の装束にあつて一流の服の名となれりと
いへり
すゐはん　水飯也源氏栄花などにみへたり今の世にをいて
ひめといふ物なりといへり本草に飱飯を水飯なりといへり
すゐだち　水撥なるべし花生をかけるに用ゆれん形三線の撥の

如し

すゐせん　水仙をよめり一重なり八重なり一重なるを金盞銀臺といふ八重を玉玲瓏と云朝鮮の水仙ハ花同じく葉至て細し夏水仙あり無義草也薄紅と黄色との二花あり○食物にいふハ水線とよめり内々行事に葛きりのことと見ゆ或ハ水繊又水蟾とも作る

△すゑの　末野の義野の末をいふ末蹟も系などもよめれども古くハ全くあらずといへり○續紀の陶野ハ山城國葛野郡嵯峨の辺なり

すゑだこ　前机安居箸と智恩院法事次第に見えたり

すゑふろ　居風爐の義所を定めず時々臨んで居る也

すゑもの　居物の義今の土壇居物して刀劔を試ることハ織田家の時谷大膳亮より起きりとぞすゑものしハ魁膾なるべし法苑珠林に見えたり　劊手とも見ゆ者きりの類也○和名抄

に陶をよめり

すゑのま　新撰字鏡に窯をよめり陶釜の義又㙇をよめり

すゑつひに　末終にの義後終ひといふに同じ

すゑぶろ　金匱要略に坐藥と見えし千金方にハ坐導藥とみえたり坐湯といふも同義なるべしぶろともいへり

すゑのつゆ　末の露とハ草の葉なる末の露之本の雫に對していへり

△すゐろし　鷹にいへり巣下の義也

せの部

せいじ　東鑑に毎政事訪朝廷非宜命敢未裁之於武家官途者関東之為内挙鳳闕宿直大番等者為関東指麾禁裏造営等迄諸門築垣咸命諸侯大夫不日経営崇敬朝廷无二尊无軽忽之念とみえたり

せいご　松江の鱸ハ我邦の産よりハちさしといへバせいごハ松江の轉音なるべしといへり明の流寓の朱舜水も松江の鱸と形味相同といへりとぞ鱚をよむハ誤也○雲州の松江を鱸より出たる名なるべし出雲の鱸の事ハ古事記にみえしより今もまさに其味の美を称せり○松をずんとよむハ清音の訛ふに稱光院の音を避といへり○奥州にて奥せいごといふを江戸にいふいちきの事也

せいひ　青波とかけり舶来の皮也

せいもく　聖目とかけり碁聖より出たる名なるべし徒然草にひじりめとよみてあり○南都正倉院所蔵の盤にて一ハ常の聖目に

四ッ多くて中の四ッなり一八五ッなくひして五と二十五点あり其点櫻花を繪けり

△せうえうや　庭中謌謝恩の作の日記に見ゆ

△せをはやみ　岩にせかるゝ瀧川のハ詞花集に題しらずとみゆ万葉集に一瀬かれたるといへり逝水の後なるもあらん今おもふにすゝしもの此哥の意ありいはゆるせの高く八障あることを云へり古今集の下の帯の道ハかたがた別るとも行めぐりても逢んとぞおもふワれても末にハ万葉集にたるよしいてたる水のいきほひなり破てもおもふ末にあはんといふ上句ハ序也上の句の例ハ後撰にせをはやみたえす流るゝ水よりも絶せぬ恋の八意すゝむるけ

崇徳院ハ鳥羽院の御子也

△せかい　世界といへり選流を世と云方位を界といふといへり五大洲曰亞細亞曰歐羅巴曰利未亞曰亞墨利加曰墨瓦臘尼也日本ハ亞細亞州内也此國四時中正之國也其京畿中央に在て正氣の中線に相中るといへり

ぜがいさう　白頭翁をいふ善界草の義なるべし能の善界にもやくホ仏家なまうしふ又ちごの舞といへり大坂にひめだるま江戸におきなぐさ畿内にりちごだるま美濃にかぐ草加賀にけしくまなくさ甲斐に傾城草木曾にかぶろ越中におふごろ又天狗のかくで仙臺にちちんと下野にちちこ又かうろちご筑紫にねこぐさ飛彈にきのゝなみひ又二のつき四國に亟どのなどいふ又ちやぐ良柴胡と称す傷寒論集注に白頭翁與柴胡同類といへり

△せきさい　石麻といへり薩州より出といふ滑石の種とや南城志に莱濠州に出者理粗質青有黒點亦謂之班石作器甚精好といへる類にや

せきもり　関守也日本紀に関司とよめり

せきがはら　関が原也美濃也

せきのしみづ　伊勢物語に大原やせきのしみづとよめり真名本に堰之志水とあれば山水をせきとめし水なるべし

せきぞうやう　石蓯蓉也石に生じ根なくして茎黒く梢に葉叢生すつ
げの葉の大さにして草類なり琉球の産也
◇せすゐい　朝鮮西生浦のよし見ゆ
◇せつとう　浙江省也此内に寧波府定海縣もあり大漁厰と云
湊も定海縣の知縣正七品之巡倹使もあり寧波府の知府正四品
也武官遊撃もあり総兵官ハ正二品也平湖縣もあり日本へ通商
の范氏十二家も此所にあり正月元日餅を煮て砂糖を掛て出す
紅唐紙を角に切大字にて福壽康寧の文字一字づゝ書き角違ひ
にして門にはるなり
せつたい　佛祖統記に施以湯茗無問道俗結屋數楹創為接待と
みえたり
せつしやう　攝政とかけり○漢書に攝然天下安とみゆ西土漢の
霍公より始まる本邦ハ聖徳太子に始る
◇ぜねらる　和蘭より咬𠺕吧に居置し代官の名也年々此まで貨

物を雖勘し十五年に一度本國の四王に告といふ
◇せのき　檨の奥州の方言也仙臺の茂崎山に此木多し大なる
ものハ一圍二圍に及べり瀬木の義にや若木老木をいはず山に樹な
ごとく幹枝相具りて能石に化せるといふ老木とみえども青くしてさ
ふもあり所によりてはくさりともいふ
せのを　姓に妹尾とかけり盛衰記にみえ備中の郷名也妹尾
ハ東鑒よりみえてあまたゝび妹ハ妷の謬なるべし
せのじ　参州妙大寺村是の寺と云ける満珠山龍海院なり清
康公此寺にて是字を考見ませし即日の本の人と相せさせられ
天下をしろしめすべき字夢と覺せしとぞや
◇せひ　倭名抄に鯖をよみて婢妾魚也と注し今訛婢妾謂妾
婢と見ればせひハ妾婢の音也新撰字鏡に鯆をよみて侍中群要
に世比とみえたり
◇せふ　少輔のよみくせ也

〈せく

蝉を云音をもて訓とするなり新撰字鏡にせびと訓せり今もさいへれば鳴聲をもて名けしなり又背生也といへり〇倭名抄に馬蜩むませみ蚱蝉なはせみ寒蝉かむせみとよめり貝原氏の説にみえたるせみは三月に鳴ものゝ蝭母也熊蝉は晴日辰巳の時になく赤蝉は晩に鳴倶に夏月にありといへり馬蜩は山せみともいふ薬肆の木のかり也〇禮記に蝉に有緌と李時珍蝉花の事とあるは誤れり蝉の腹の方にさがりてある者也〇霊異記に涼字をよめりこは音轉なるべし蝉の滝は吉野山にあり今清明か瀧ともいふを訛るべし蜻蛉(カゲロウ)の小野より蜻蝏の字に用らるともいふ滝の形蝉に似て鳴声も蝉の如し〇船の帆柱の上にて綱を通す穴をせみといへり明律考に皎轆を譯せり内宮年中行事の詞にも見えたり太平記に蝉本白くさしたる青竹の旗竿とも見えたるも同義なるべし的串なるもせみといへり〇鯨にせみといふあり本せびなり脊乾の義其脊水面に出て乾くなるをもて名くといへり

せみがい

蝉貝の義なるべし夫木集に

蝉貝のあつまるしほかはむろ松の岸うつ波の寄るなりけり

むろ松は伊勢大淀の近邊也

せみたけ

蝉茸の義伊勢神戸の竹林中にありて年毎に出其せみは蜩にて茸は直に茸ならぬも種々の形状あり蝉花是也戸田氏芝の属といへるは反て誤れり蜩地中に化生して出得ざるものゝ成たるものゝ多し又摂州高槻には蝉の脱して木によりたる蝉退に花の附たるも甚多しとぞ

せみのもぬけ

蝉脱をいふ後撰集書にみえたり

〈せんき

先規とかけり先にありの規格をいふ

せんさ

大嘗會にあり悠紀方の鮮味は雉と梅の枝につけたると蚕柑と楕果とを鬚籠に入て松の枝に結ふるを奉る主基方は鳥を楓の枝につけ鶉を萩の枝につけたるとぞ

せんせ
　松前にいふ蝦夷にてくらうらをいふ
せんだい
　後拾遺集の辞書に先帝をよむ音也
せんぐう
　天武天皇十四年に始りて伊勢大神宮正遷宮の儀二十年に一度の例九月を用ひ玉ふ大神宮式にあり足利乱世により三百年来廃したるを織田信長公鳥目三千貫を出して旧例に復せり森蘭丸奉行すといふ三千貫当時三万石に当る此例をもて今も三万石下行せらるそれより後ハ二十一年めを年限として永く絶えず往古の如しとぞされど持統天皇元年より始るとし本朝通鑑にみえたり一説に四年庚寅九月を内宮正遷宮の始とし六年壬辰九月を外宮の始とみえたるも故ありて二十年に満ずして改造る事有を臨時の遷宮といふ又当方の遷宮を仮殿遷宮といふ将軍義政の時に正遷宮ありて兵革止ざるによりて永享三年より寛正三年まで三十三年を経て造替ありしとぞ寛正三年より天正十三年まで百二十年余乱世にて仮殿だにありけるとぞ後水尾院寛永六年己巳九月二十一日内宮正遷宮二十三日外宮是より九月の例にかへれり日時ハ臨時に宣下あり内宮寛正遷宮紀の詔刀之れ寛政三年十二月二十七日とみゆ
せんだん
　内典に赤者謂之牛頭栴檀黒者謂之紫檀白者謂之白檀といへるにより又黒檀あり今楝を栴檀とよぶハ大に非也又印海にあり栴檀を伽羅也といへり
せんぶり
　当薬ともいふ胡黄連といふハ非也千度振出しても苦味あるをもて名く斜枝菜なりといへり
ぜんまい
　薇をいふ銭葵の義嫩芽の銭の形して廻転せるをいふなるべし古書にぜんまいの名なし倭名抄にも尓雅を引て薇蕨とあはせてわらびと訓ぜり○細工にぜんまいといふも薇より出たる名にてこしびての名あるが如し○いぬぜんまいを毛蕨なりといひあり又ひのきぜんまいもあり
せんだう
　朝野群載御体御卜の條に三重郡司柴田郷専当

見えし安東郡専當沙汰文にも史にみえてあるハ類聚國史に弘仁中に夷俘専當出たるが始となん建保中に上皇日吉御幸に専當童と見えたり

せんざい　鉄砂と云織屑の義なるべし

せんなり　壺蘆といふ其多くなるをもて名く

せんだん　大諸礼にせんだんにせんだん焼などゝ見えたり今せんだんといへり信濃遠江上総下総にてハ鍋の事をいへり煎盤の音にや四國にて銅にて制したるをもいへり

せんべい　述征記に煎餅とかけり薄脆也といへり出羽の秋田におつるすゑといふ高麗煎餅とよぶハ程子遺書の黄熟香也といへる一口香と見えたるハ唐饅頭の事也とぞ○鬼脆薄あり○煎餅石ハ菰野にあり

せんりごま　千里駒の義花の形駒頭にて葉ハ地黄の如し胡面莽也といへり

せんりやう　草花譜に青珊瑚園史に珊瑚と云是なり其実百両金にまけるとをもて千両と名くといへり實の黄なるもあり又萬両と称する者もあり紫金錠とも呼又姫万両あり矮短之共に同類之百両金一名山珊瑚ハやまたちばな也といへり

せんをうけ　仙翁花とかけり嵯峨の仙翁寺より始て出たると下学集に見ゆ剪秋羅也といへり今色ハ種々に變せり○小倉仙翁ハ花葉小なり享保中に来ぬ伊勢麻生田山にあり○但馬より出るを今賞せり

せんねんはう　千年草也葉色赤く筋あり杜若に似たり琉球より来ぬ冬葉ちるといへりしかれども南方草木状に冬葉を薑葉あらしにまたハ千年草に非ざるべし○近年京師にてみえしハ朱蕉也といへり

せんにちこう　千日紅の音也白花あるもあり十月頃に茎ともに切て陰干にして冬用ゆ

せんざんこのふ　穿山甲とこのけり近世海西處々豊後なとく希ふ有て漁人網し或ハ鉾とめて刺とそり
せんふんさう　仙人草とこのけり蔓草也救荒本草の大蓼之又ふつくさといふ俗名ハのげといふ
ぜんのつな　李奇か説ニ引棺車謂之紼と是なり開帳の場ニ佛掌より綱を引て衆手ふ引しむるともそり善の音なるべし縁を結ひ善ぶ作る義也所願を念じて本尊に對するふ像の臂肘股肱ニ繩をかけて引事靈異記ニ見く灌頂經ニ佛像の耳ニ糸をかけて行者手にとり悉地を祈る事みえそり庭訓ニいふ縁道絹も是也とそり
◇ぜめ　小魚の名によぶり脊ふ一針あり

曾の部

そうらい　奏禮なるべし思の儘の日記にそうらいた大臣三人残ふとみゆ
◇そか　俗語にそかにまろなどいふそおろそかの略粗の義ふなべし○釋典に楚夏といふ事みえたり釋鐵に言楚夏者京華為夏淮南為楚音詞不同所詮不異といへり三才圖會に夏楚師匠也凢撻而訓之曰夏楚ともみえたり
◇そゞく　俗に田のやしふ入ふ草をとり
そゝろ　倭名抄に蒴藋此間音おそくとくとみえたり新撰字鏡同じそゝろハ轉訛せる音也又草ふろといふ
◇そこら　万葉集にみゆるそこらふ同じ
そこばくと訓く　源氏にみゆる彼處許とかくの義なるやいづくをいづくとも云り又そのハ語のたすけなりや
◇そさのを　素盞雄ハとかふ呉音也

◇そゝろ　倭名抄に鴉をよめり鷙鳥食已吐其毛如丸也と註せり今鷹にそゝろ打といへり○近江にそゝろといふ里あり今笹路とかけり

◇そてつ　蘇鉄ハ中山傳信録に見ゆ琉球のやし皮又ふえんさといふ物を称賞せりや皮ハ八重山にて山ハ姑米山にも属嶋也五雑俎にハ鉄蕉と見ゆ本草にハ鉄をもて養ふすハ見えしん豊後の一山に多く蘇鉄也といへり○草蘇鉄ハ狗脊也といへり金毛狗脊ハ船来也

そでがひ　袖貝なるべし蝸蠃の類也夫木集に
波あらふ衣のうらの袖貝をしきたへと風のたゝみおくかな

そでぐゝみ　源氏に見ゆ著聞集に袍の袖ぐゝみと見えたりをるゝ手を懐にしてかくゝむる也

◇そとらふさ　外羅城をよめり難波の鎮府の石畳に肥後石さいあり長さ八丈廣さ五丈ばかりといへり

◇そのひと　古事記に苑人と見ゆ苑をつかさどる人をいふにや

そのいけ　大和本草に木瓜に似て刺ある物なりといへり

◇そばうり　大和抄に胡瓜を訓ぜりかど立たるものなれば名とせるなく俗にきうりといへり

そばきり　蕎麦切也甲州の天目山より始まるといひ傳へて本草の河漏是也といへど河漏はそばきりの類なるべし典籍便覧にいふ黒児是也ともいへり○そば掻又そばがきといふ出羽にそつぶどころといふ○書言故事の注にハ可漏子ハ封皮也と羅山文集に見えたり

そばのき　倭名抄に枫稜をよめり唐韻に四方木也といへり○延喜式に卯杖にそばの木を用ひ蜻蛉日記にそばのきとあり枕草子にそばの木えしなき心地すれども花乃木どもちりはてておしなべてみどりになりたる中に時もわかずこきもみぢのつやめきておもひかけぬ青葉の中よりさし出

なりしきされど一種の樹ありしとなり今いふものハ山中に生ず
葉櫻の如く四月花を開く水仙に似て臺になり群開して白きこと
雪の如しと貝原氏いへり

△そに
日本紀倭名抄に鴗をよめり中山傳信録に鴗俗呼
神鳥ともいへり古事記に翠鳥とかけるハ正しそにともそにどりともよ
めり江家の日本紀にそにはとよめり俗にこれをかはせみといへ
り中國にすゞめ武州下野にそびといふ甲斐にそびといふ加賀にむく
ろ備前美作にはちまれ下総にちどりといふ仙臺にはしぐり沼津にそえび
鳥といふ文徳實録に魚虎鳥とかけるも正しとぞ今俗川せみと
いふなり川ハミせみそびといふ物に似しといへりせみハそびの轉也又せ
うびともいふ埃嚢抄に少微とかけりそびの轉ぜる也又漢名をもて
翡翠とよめり格物論に翡翠一種而二色翡翠ハ即ちやまそび俗
に山せうびんといへり或ハ水乞鳥ともいふ

△そぶえ
信長の家臣に祖父江といふ氏あり

△ぞくぶ　俗語也草木のおび過たるふまたなどよといへり

△そよだ　葉も木だちもおちおちの如くふとく秋赤きを云へりて
しげる木をいふとぞ

△そらじ
延喜式雜菜の中に蘸羅自六斗とみえたり和名
鈔に藁本を訓ぜり又さぶいそうしとも見え篠葉にや新撰字
鏡に藉茹をよめり稜蘡又蒿莽とのそらじと訓ぜりの八野の
義也

△そらまめ
蠶豆を訓ぜり實のそらに向てあることのなりゆゑとも
いふ西國に唐まめ出雲に夏まめ相摸にふゆまめ遠江にがんまめ
ともいふ○花に黒色あしといふ此花のに黒白相半して咲り古
人紫色といへるハ非也黸黒墨の如し○下総にゆきまり豆伊豆
駿河に五月豆といふ

△そらづのき　溟捜をよめり

△そらおぼえ　侍中群要に懐記とみえ所謂暗記也

△そろの　少き蘭の名也溝などにそろひて生ずるよりの称なれば
名とはなるべし新六帖に
さしめへくそ夜の莉らん莛とちれのれろく麦かと老見ゑ

倭訓栞後編巻之十終

国立公文書館
National Archives of Japan